

1946

1946年のベストセラー

順位	書名	著(編)者	出版社
1	旋風二十年	森正蔵	鱒書房
2	愛情はふる星のごとく	尾崎秀実	世界評論社
3	腕くらべ	永井荷風	新生社
4	哲学ノート	三木清	河出書房
5	嘔吐	J.P.サルトル	青磁社
6	完全なる結婚	V.D.ヴェルデ	ふもと社
7	架空会見記	A.ジイド	鎌倉文庫
8	凱旋門	E.M.レマルク	板垣書店
9	自叙伝	河上肇	世界評論社
10	漱石全集	夏目漱石	桜菊書院

1957年のベストセラー

順位	書名	著(編)者	出版社
1	挽歌	原田康子	東都書房
2	檀山節考	深沢七郎	中央公論社
3	鍵	谷崎潤一郎	中央公論社
4	美德のよろめき	三島由紀夫	講談社
5	一日一言	桑原武夫	岩波書店
6	愛のかたみ	田宮虎彦・千代	光文社
7	いろ艶筆	佐藤弘人	新潮社
8	昭和時代	中島健蔵	岩波書店
9	ロンドン—東京5万キロ	辻豊・土崎一	朝日新聞社
10	暖簾	山崎豊子	東京創元社

1957

ラーリストというものは「読まなくてもいい本のリスト」と思っただけで、書き手の一人としていう。わたしの本が売れなくて、本当によかったよ。ベストセラーは古典になり得るだろう。戦後のベストセラー史

を振り返って考えてみよう。参考にするのは『出版指標年報』2019年版、および同2015年版掲載のベストセラーランキングである。ベストセラーはクズばかりだと述べたが、昔からそうだったかという、必ずしもそうではない。少なくとも戦後間もなくのころは。もちろん昔も玉石混雑だが、「玉」と「石」の混合率が今よりはマシだった。

たとえば一九四六年のベストテンには、永井荷風『腕くらべ』、三木清『哲学ノート』、サルトル『嘔吐』、レマルク『凱旋門』などが入っている。いずれもいま読む価値があるし、たぶん五〇年後も読まれているだろう。これこそ古典。五〇年代一〇年間の各年間ベストテンを見ると、谷崎潤一郎の『細雪』や『潤一郎訳源氏物語』、マーガレット・ミッチェルの『風と共に去りぬ』などが複数の年にランキングしている。つまり長く売れているのだ。単年だけの登場では、ノーマン・メイラー『裸者と死者』、大岡昇平『武蔵野夫人』、マーク・ゲイン『ニッポン日記』、ポーヴォワール『第二の性』、深沢七郎『檀山節考』、谷崎潤一郎『鍵』、五味川純平『人間の條件』、井上靖『氷壁』、『敦煌』などがある。

もともと、作品名や作家名が知られているからといって、それが古典の名にあたいするかどうか

この続きは本誌でどうぞ！

わたしは長いこと二つの週刊誌でベストセラーの書評を連載しているのだが、いつも取り上げる本を選ぶのに苦労している。せっかくだから紹介するのだから、おもしろい本を選びたいと思っっている。少なくとも、払っただけのお金と読むために要した時間に見合うだけの価値ある本を選ばなきゃと思っっている。だいいち、書評を書くわたし自身が苦痛ではたまらない。「いい本はないか」と書店や取次が発表するランキングを毎日のようにチェックしているのだが、正直いってひどい本ばかりなのだ。だいたい上位一〇位までにはろくな本がない。一位から三〇位までのあいだに少しましな本が入っただけ、取り上げたくなる(＝読みたくなくなる)ような本はたいてい二位以下にある。つまらなさそうなのは、実際に読んでみるとほんとうにつまらないし、おもしろそうに見えても読んだらつまらないということも少なくない。ベストセ

ラーリストというものは「読まなくてもいい本のリスト」と思っただけで、書き手の一人としていう。わたしの本が売れなくて、本当によかったよ。ベストセラーは古典になり得るだろう。戦後のベストセラー史

を振り返って考えてみよう。参考にするのは『出版指標年報』2019年版、および同2015年版掲載のベストセラーランキングである。ベストセラーはクズばかりだと述べたが、昔からそうだったかという、必ずしもそうではない。少なくとも戦後間もなくのころは。もちろん昔も玉石混雑だが、「玉」と「石」の混合率が今よりはマシだった。

たとえば一九四六年のベストテンには、永井荷風『腕くらべ』、三木清『哲学ノート』、サルトル『嘔吐』、レマルク『凱旋門』などが入っている。いずれもいま読む価値があるし、たぶん五〇年後も読まれているだろう。これこそ古典。五〇年代一〇年間の各年間ベストテンを見ると、谷崎潤一郎の『細雪』や『潤一郎訳源氏物語』、マーガレット・ミッチェルの『風と共に去りぬ』などが複数の年にランキングしている。つまり長く売れているのだ。単年だけの登場では、ノーマン・メイラー『裸者と死者』、大岡昇平『武蔵野夫人』、マーク・ゲイン『ニッポン日記』、ポーヴォワール『第二の性』、深沢七郎『檀山節考』、谷崎潤一郎『鍵』、五味川純平『人間の条件』、井上靖『氷壁』、『敦煌』などがある。

もともと、作品名や作家名が知られているからといって、それが古典の名にあたいするかどうか

戦後の歴代ベストセラー作品の数々。タイトルを見るだけで、当時の世相が浮かび上がってくる。



特別寄稿

ベストセラーは古典になり得るか

永江 朗

(フリーライター)

「ベストセラー」と聞いて、あなたはどのような印象を持つだろうか。激しい時代の変化や、遷り変わる読者の心をとらえた名作？ それとも、ひとの欲望や心の弱みにつけこむ、読むにあたいしない駄作？ 戦後のベストセラー作品が、これからも読みつがれていく可能性について考える。